

ダルニー通信

71
2013
秋号

特集

支援対象5カ国の 中学校教育の現状

| 宗沁会が子どもたちの茶会で
ラオスの子どもたちを支援
| 繩田隆史氏の連載エッセイ第2回



中学校教育の現状

一般財団法人 民際センター

理事長 秋尾晃正

GMS（グレーター・メコン・サブリージョン）と呼ばれるメコン川流域の5カ国、タイ、ラオス、カンボジア、ベトナム、ミャンマーの唯一の共通点は仏教ですが、社会体制、経済発展の度合、教育制度に違いがあります。そして現在、急激な変革期に直面しています。その原因是、魅力ある投資対象国として脚光を浴びているからと言えるでしょう。言い換えれば、総人口2億3千6百万人のGMSは重要な経済圏として世界に認識され始めたからです。それ故に、政治、経済、社会環境、生活習慣に急激な変化が起きており、教育にも大きな影響を与えています。都市ばかりではなく伝統的な村社会もその影響は大きく、その速度は一層早まり、豊かさを求めて国を超えての出稼ぎや新メディアによる情報の氾濫等、無防備では生活できない時代になってきています。

メコン5ヶ国は国境を接するが故に、紛争の歴史がありました。複雑な国民感情が存在し、必ずしも友好国同士ではありません。こうした状況で、メコン経済圏が欧州のEUのように地域統合体を形成し、国同士が相互の発展を促す関係を築くことができるでしょうか？こうした問い合わせを投げかけるのは、経済発展を遂げ、政治的軍事的影響力が強まる中国に対して、メコン5ヶ国は何らかの対応が必要不可欠な時代になったからです。そして、日本の一団体に一体何ができるのか——この問い合わせは民際センターにとって重すぎるでしょうか？

日本企業は中国、韓国等企業の台頭で苦戦を強いられています。円安傾向にはあるものの、それでもまだまだ強い円や東日本大震災で工場の海外移転が不可欠で、かつ日中関係の悪化で、工場の移転先についてポスト中国が呼ばれる昨今、生産拠点としてタイを中心としたメコン5ヶ国を最有力候補国と位置付ける日本の中小企業も少なくありません。見方を変えると、日本企業の進出は雇用を拡大し、国も税収が増え、それぞれの国の発展に寄与し、安定した職を得ることで弟や妹の学費をねん出でき、教育の普及にも貢献する。そのような状況の中、安価な労働力のみならず、良質な労働力が必要です。

教育予算が潤沢でない国は教育の質と量に課題がありますが、初等教育の就学率、進級率は充実しつつあります。しかし、次の段階の中学校教育はまだ大きな課題です。国際教育協力に特化した日本のNGOとして、皆さんから寄付された浄財を最大限に活用し、その国の経済発展に寄与し、貧困削減を実現したいと思っています。以下の基本情報は、各事務局で集めた直近の小学校・中学校・高校の総数です。年度に1~2年の違いがありますが、数字を見れば、中学・高校への就学がいかに難しいかが推測できると思います。

メコン5カ国及び日本の基本情報

| | 人口(人) | 学校制度 | 小学校総数 | 中学校総数 | 高校総数 |
|-------|----------|-------|--------|--------|-------|
| カンボジア | 1,500万 | 6:3:3 | 6,910 | 1,622 | 433 |
| ラオス | 600万 | 5:4:3 | 8,192 | 1,375 | 549 |
| ベトナム | 8,900万 | 5:4:3 | 15,337 | 10,562 | 2,669 |
| タイ | 6,400万 | 6:3:3 | 29,054 | 9,429 | 2,361 |
| ミャンマー | 6,200万 | 5:4:2 | 37,225 | 2,445 | 1,101 |
| 日本 | 1億2,790万 | 6:3:3 | 22,000 | 10,862 | 5,204 |

※日本では上記の学校数以外に幼稚園～高校まで特別支援学校が1,039ありますが、小中高と区別された数字が把握できなかったので、上記には含みませんでした。

※タイでは小学校のみ、小中、中高に分かれており、中学校のみ、および高校のみの学校はありません。



タイの中学校の先生

「支援者は奨学生の 2番目の親です」

ソムスップ・チャイプロンマ先生
(教師歴29年、ダルニー奨学金担当歴5年)

ダルニー奨学金は奨学生の成長のみを期待して見返りを求めるという点で、無私の気持ちからのホンモノの支援だと思います。学校でダルニー奨学金担当として働いて、この奨学金が子どもたちの教育にとても役に立っていること、さらに親が負担する教育費の軽減にも大いに貢献していると実感しています。私は奨学生に言います。「ダルニー奨学金は国際的な奨学金だから選考は厳しく、期待は大きいのです。奨学金をもらった生徒はその期待に応えるべく一生懸命勉強しなければなりません」。

経済的に貧しい子どもたちも将来の目標を高く掲げます。そして支援さえあれば、大学まで勉強を続けることができます。ある支援者が4人の女子生徒を中学・高校の6年間だけではなく、さらに大学まで支援した例がありました。この4人は私の勤務する学校の生徒ではなく、4人は別々の大学に通っていますが、私は母校だけではなく他の学校も含めた奨学金事業の評価や奨学生ともコンタクトをしており、さらにタイ事務局とも連絡を取り合っているので、彼女らの消息を知ることができました。

奨学生はより良い仕事を得るチャンスとより良い生活を求めて日々の生活で戦っています。しかし、その夢を実現するには支援が必要です。そして、ダルニー奨学金がその支援となっています。

私の経験から言えることは、奨学金提供者は単に「提供者」ではなく、奨学生にとって2番目の親なのです。彼らの希望を絶やさず、より良い生活を実現するための導き手なのです。



タイの中学校の先生

東北地方の貧困状況の 悪化と奨学金の役割

レッカ・チャナハーン先生
(教師歴36年、ダルニー奨学金担当歴13年)

タイ東北地方の貧困地帯の状況が昔とは異なってきました。昔は貧しくても家族が協力して助け合い、親がしっかり子どもたちの面倒を見てきました。しかし今日、親は簡単に離婚して子どもたちを捨てて、再婚したり、出稼ぎに出たりしてしまいます。家族の崩壊です。残った子どもたちはさらに貧し



い親せきに預けられ、愛情もしつけもなく育てられます。こうした現状が様々な社会問題を生み、夜遅くまでゲームセンターにいたり、麻薬などにおぼれたりして、いつの間にか犯罪に巻き込まれてしまいます。

ダルニー奨学金は、こうした環境に置かれた子どもをたくさん支援してきました。思春期の難しい中学3年間、奨学金をもらうことで、悪い環境に染まらないようになるのです。中学を卒業すれば、一応、自分の力で考えることができます。

最近、心に残った支援は、しょうがいを持つお父さんと暮らす子どもの話を掲載したタイ事務局(EDF-THAI)のホームページを見て支援を始めたシンガポール人、ベルウィット・シンさんです。シンさんはこの父子に家を建て、毎月の生活費を送っています。この父子に一度も会ったことがないのに。

私は今年、定年退職します。でも、ダルニー奨学金を担当して、EDFと働いた13年間はとても有意義でした。最後にこの場を借りて、支援者の皆さんに心からお礼を言いたいと思います。



ミャンマーの中学校の先生

奨学生がクラス内の 勉強の雰囲気を盛り上げる

ティン・ティン・ソエ先生

私が勤務する中学校は19人の先生と567名の生徒がいます。様々な階層の生徒がいて、経済的に貧しい家庭の子どもが少なくありません。貧しい家庭の親は教育を大切に思っておらず、学校を辞めて働く親もいます。運の悪い子は人身売買で売られてしまうこともあります。政府は貧しい子に奨学金を提供していますが、私の住む町にある、すべての学校で昨年度の受給者は2人だけ。今年は私の勤務する中学校の中1の生徒2人だけです。

ミャンマーは小学校が5年、中学校4年、高校2年の計11年制です。中学校は4年間と長いのですが、高校はその半分の2年間なので、中学校の4年間を終えれば、高校に就学しやすいのです。中学を退学しないためには、先生、生徒、親の3者の緊密な関係が必要です。貧しい学校ではさらにもう1者、つまり支援者の4者が必要です。ミャンマーでは、仏教の教えに則り、貧しい子の教育援助をした人が生まれ変わったならば、幸福が待っていると信じられています。

奨学生をもらう子は、それによって人生が大きく変わることがあります。中学校を卒業後、高校に就学し、さらに大学に行って勉強したいとの意欲を持つ子もいます。私の町で20年前から奨学金を提供している韓国のNGOの例をみると、奨学金をもらった生徒はめったに退学しません。しかも、奨学金をもらっていない子が奨学生に敬意を払い、勉強により一生懸命になります。こうして奨学生とそうではない生徒が励まし合って成績を上げて行きます。

ダルニー奨学金はこの国で始まったばかりですが、支援者の方がもっともっと増えて、貧しい子の中学卒業の機会を提供して頂ければと思います。





ベトナムの奨学生

激しい雨が降った卒業式

チャン・ティン・ヒエン（12歳）

7歳の時、私は孤児になりました。母が亡くなる直前に、このように言いました。「私たちは貧しいけれど、お前はしっかり食べて病気にならないでね。学校に通い続けられるようにお金を管理してね。そして、社会にとって良き市民となるようにしっかり勉強してね」。私はその時以来、祖母と暮らしています。貧しさは相変わらずで、いつも食べ物が不足しています。学校に通うのに使

うお金は、私たちの生活にとってはとても贅沢なお金でした。小学校の5年間、同級生の友人たちが親から愛情をもってしっかり面倒をみてもらっているのを見るにつけ、貧しく両親のいない自分を憐れんでいました。同時に、いつ落第するか、毎日びくびくしていました。

小学校の最後の日、激しい雨が降っていました。同級生の友人達は中学生に就学することにウキウキしていました。学校には多くの親が傘を届けに来ていました。しかし、私には悲しい未来が待っているだけでした。祖母から「中学校に行かせるだけのお金がない。働いて生活費を稼ぎなさい」と言っていたのです。激しい雨の降る小学校最後の日は、私の人生で学校に通う最後の日になるはずでした。ああ、なんて惨めな日。

しかし、そこで奇跡が起こりました。ダルニー奨学生が救世主として現れたのです！

奨学生がもらえることになり、学校に通い続けることができるようになったのです。母が最後に言った願いが実現したのです！社会の良き市民になる知識を得る機会がさらに与えられることになりました。中学校では友人を妬まなくなりました。なぜなら、両親はいなくても、私には奨学生を提供してくれる人がいるからです。



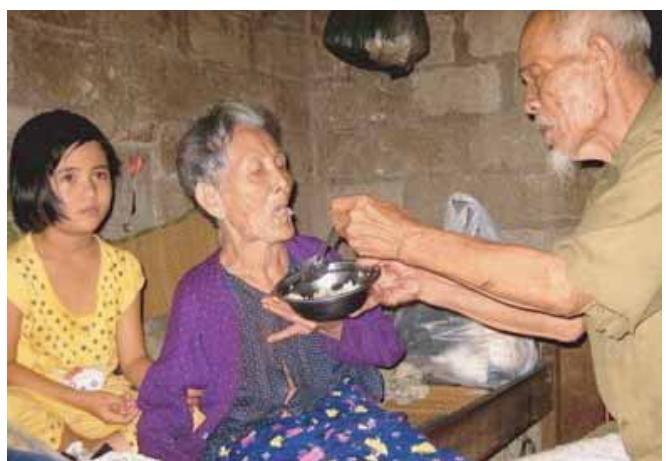
チャンと祖母

ベトナムの奨学生の祖父

日本兵に母を殺された祖父

グエン・コク・ラック（77歳）

1944年。私は7歳でした。母は日本軍に殺されました。その時以来、日本に関するものすべてに憎悪を抱いてきました。私の家には日本製のものはありません。私にとって「日本」という名は、単なる国の名前ではなく敵でした。



グエンさん（右）夫婦。左は孫のグエン

時が過ぎ、私は地方に住む、年老いた、病気持ちの老人になりました。家族は貧しく、孫が十分な教育を受けられるような経済状態ではありません。小学校卒業後は中学校に行かずに働くように言った日、孫は大声で泣きました。でも、そうするより他に仕方がなかったのです。

ところが、それからしばらくたって、孫が満面の笑顔で帰宅しました。日本のNGOから奨学金を得て、中学校に通えることになったと言うのです。「日本だって！日本人を信じるのをやめなさい。私は日本人の残酷さを知っている。日本人が私たちを支援するなんて事を信じてはいけない。その奨学金を断りなさい」と孫に言いました。

その後、EDFの職員が何度も家に来ました。奨学金を受け取って孫が中学校に通えるようにしてほしいと私を説得するためです。そしてついに5度目の訪問で私は彼らの情熱と誠実さに打たれ、奨学金を受け入れました。私の憎悪が融けてなくなった瞬間です。私の目が憎しみの感情で曇っていた4分の3世紀の間、日本はベトナムに様々な支援をしていました。経済的に貧しい子どもたちへの教育支援もその1つです。

日本よ、ごめんなさい。私は頑固者でした。

奨学金のお陰で、孫が中学校に通えるようになりました。

このことがきっかけで、私は1つの事を学びました。日本軍と今の日本人は違うということ。当時の冷血な日本の軍国政府と今の人々の気持ちは違うということ、を。奨学金のお陰で私の心から憎悪を取り払い、新しい人生を開くことができました。

ラオスの奨学生

祖母と2人の生活

ソムバンは58歳になる祖母と2人で暮らしています。離婚した両親は再婚し、現在、それぞれ別の家族を持っています。ソムバンの生活は貧しく、好きなことをする余裕はありませんが、祖母と二人で助け合いながら暮らし、すべてのことに感謝しながら生きています。特に祖母には心の底から感謝しています。祖母も孫を可愛がっています。しかし年齢を重ねて、もはや働きに出ることはできなくなりました。今では家で「カオトム」というお菓子を作り、市場で売って生活費を稼いでいます。収入は十分ではなく、売上額によっては食べることができない日もあります。

ソムバンは毎朝、家を掃除してから学校に行きます。徒歩で15分です。急いで学校から帰ると、祖



市場で働くソムバン（右）

母とお菓子を作ります。祖母が市場でそれを売りますが、祝日には彼も手伝います。全部売れると、その日は食事をすることができますが、売れない日は食べるものが十分ではありません。販売額は1日200～300円でしょうか（そこから原材料費を引きます）。

祖母は孫の将来を心配しています。「もし私が死んだら、この子は1人で生きていかなければならぬから」です。警察官になりたいソムバンの夢をかなえてやりたいと思っていますが、食べるだけで精いっぱい、先のことはまったくわかりません。今は奨学金をもらって中学校に通っており、ソムバンも祖母もそのことに感謝しています。



カンボジアの奨学生

将来はN G Oで働きたいから、勉強をあきらめない

カンボジア南西部のカンボット県は内戦終了が遅れたため、経済的な貧しさが他の県に比べてより深刻です。そのため、子どもたちが学校に通い続けるのが他の県よりも困難な場合が多いです。

同県の中学校に通うスルングは17歳で中学2年生。お父さんは病気で亡くなり、お母さん（45）とお婆さんの3人で暮らしています。お母さんは首都プノンペンの家庭で老人介護の仕事をしていて、月50ドルの収入があります。

スルングは一人っ子なので、体調がよくないお婆さんの看護も含めて家事をすべてしています。そして、週末や長期の休みには少しでも収入を補うために、つかまえたカニの調理やハーブ摘みなどをして1日約1ドル程度を稼ぎます。しかし、スルング自身も実は肺に持病を持ち、栄養不足から時々、意識を失うことがあります。

彼女の夢はN G Oで働くこと。自分たちの社会をよくするために。そして、その夢を実現するために毎日、生活と戦っています。理科が好きで、成績はトップクラスです。「今の私の目標はまず中学校を卒業すること。奨学金を受けたことで、その目標がぐっと近づきました。支援者の方に感謝しています」。



学校で勉強するスルング（中央）

お詫びと訂正

ダルニー通信68号及び70号で
名前と数字が間違っていました。
お詫びとともに、以下のように訂正いたします。

- 68号4ページ
渡邊美奈子（誤）→ 渡邊奈美子（正）
- 70号3ページ ラオスの合計金額
443.80（誤）→ 338.80（正）
- 70号9ページ
西田哲也（誤）→ 西田信也（正）

サッカーの恩人

65年も昔にサッカーをはじめて、やがて高校・大学で全国優勝をしたぼくですが、そのころ、やがて日本代表がワールドカップの本大会に連續出場するようになるなんて、夢にも思いませんでした。

ところで、いま健気いっぱいの日本サッカーの基礎を築いてくれた恩人は、じつはミャンマー（ビルマ）の人だった歴史は、あまり知られていないようです。

1921（大正10）年、日本代表チームは、はじめて海外遠征に出かけました。中国の上海です。出発前に代表チームは東京のある学校の運動場で、ビルマから東京高等工業学校に留学していた「チョー・ディン」という名前の学生のコーチを受けました。

ビルマはサッカーの母国イギリスの植民地でしたから、サッカーがとても盛んでした。「チョー・ディン」さんは代表の選手たちに、インステップ・キックやサイドキック、ヘディングなどの活用法、ボールを持っていない者の位置のとり方が重要であることなど、とても基本的なことを理論的に教えてくれたのです。

この「チョー・ディン」さんの教えが、日本の近代サッカーの出発点なのです。

「チョー・ディン」さんはさらに、早稲田高等学院（早稲田大学の、いわば附属高）サッカー部をコーチしました。

1923（大正12）年、同チームが初の全国高等学校（旧制）選手権大会で優勝すると、「チョー・ディン」さんは各地の高校からひっぱりだこになりました。こうして近代サッカーは全国に広まっていったのです。

わたしたちは、社会の多くのことを欧米に教えられたように思いこんでいますが、このようにミャンマー、つまりアジアの人々に教えられて、今日、立派に結実したものがあるという歴史も忘れてはなりません。

これからは、ボールを蹴ったり、試合を見るたびに、こころのなかで「チョー・ディン」さん、ありがとう！と叫ぼうではありませんか。



轡田（くつわだ） 隆史 氏

1936年東京生まれ。元朝日新聞論説委員。欧米・東南アジア・中国・中東などを歴訪。元・テレビ解説者。NHK/FMラジオ「日曜喫茶室」に出演中。日本記者クラブ、日本ペンクラブ、日本エッセイスト・クラブに所属。著書に『「考える力」をつくる本』など。

※ 轡田氏のエッセイ連載は1年間（4回）を予定しています。

2013年度 通常理事会及び 評議員会を開催

2013年度理事会及び評議員会を開催し、
主に以下の議案が報告・承認されました。

1. 2012年度事業報告・会計報告
2. 2013年度事業計画・収支計画
3. 定款変更案

■ 理事長挨拶

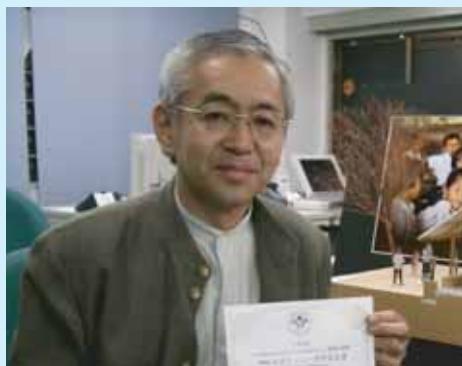
支援者からのご寄付を最大限有効に使うため、全ての海外事業所で事業の効率化が図られ、日本でもIT化を推進、ホームページからクレジットカードでも寄付ができる体制が整いました。

メコン5カ国のインフレが進んでおり、各国事業所が教育費の実態調査をした結果、奨学金を今年から年間14,400円に改定しました。

税制優遇措置が受けられる公益法人への移行も視界に入り、支援者のご寄付に対してより良好な環境が整います。

5ヶ国のスタッフがEDFグループの一員としての絆を強め、メコンという1つの地域としての意識の醸成を図っています。日本は、各国の教育者が相互理解を深める介在役を担いたいと思います。

ラオスの中学校校舎



建築家・明星大学教授
加藤 隆久 評議員

また校舎の設計をしている。18年前手探りで現在の小学校校舎を考え、それなりの評価もいただいたが、中学生の体格に合わせて小学校校舎をそのまま大きくするには技術的に無理がある。一方、18年通ううちに現地の状況もだいぶ分かってきた。そこでやむを得ずというかこの際というか、より進化した中学校校舎を改めて設計することにした。幸い理科大や東大にいる構造、地盤そして木造分野で一流の友人たちや若い建築家が喜んで手伝ってくれている。もちろん「現地の土と木を使い電気がなくても快適な教室」という基本理念は変わらない。

1. 2012年度事業報告・会計報告

① 奨学金事業

(タイ5,113名、ラオス4,697名、カンボジア1,525名、ミャンマー35名、ベトナム35名)

② ラオス校舎建設事業

(小学校4校及び高校1校完成、小学校2校建設中)

③ 図書事業

(ラオスの小学校等に220個の図書セットを寄贈。1校に図書館を建設)

④ ラオス人教師修士留学事業

(タイ国立コーンケーン大学修士課程に10名が奨学金を得て留学中)

⑤ ラオス学校給食普及事業

(事業実施モデル校3校で週1回の給食がスタート。3校の事業で収穫された農産物の総収益は21,454円)

⑥ 研修旅行事業

(「ラオス国際交流の旅」を2回実施。参加者の合計は32名)

2. 2013年度事業計画・収支計画

ラオス・カンボジアへの奨学金を小学生支援から中学生支援に移行すること等の主な変革案、国内体制の整備（公益財団法人化、寄付システム他）

3. 定款変更

公益財団法人移行に向けて、移行後の定款となる定款案が説明と共に示され、理事会、評議員会、双方において承認された。

経済的自立に向けて



株式会社エイチ・アイ・エス 取締役相談役
行方 一正 評議員

支援を受ける子どもたちや地域の自立に向けて教育支援を行ってきたが、小学校から中学校支援に切り替え、さらに中学卒業後の職業訓練を視野に入れて、子どもたちの経済的自立に向けた事業を推進したい。また公益法人化は今年度中に達成しなければならないと思う。継続的に子どもたちの成長を見、サポートするためにインターネットを使って支援者と奨学生がもっと直接に交流できる仕組みを作りたい。

子どもの茶会でラオスの子どもを支援



茶道の精神を広めようと、野木美津子さんは2006年に宗沁会を設立。翌年から「子供教室」を作ってチャリティ茶会を開催。6年間その収益金をラオスの奨学生6名に提供し、今年、そのうちの5名が中学校を卒業しました（残念ながら、1人は家庭の事情で卒業できませんでした）。

参加者がお茶席の順番を待っている間、民際センタースタッフがダルニー奨学金やラオスの子どもたちの現状を説明します。今年も同市の市民会館で子どもを含む200名近い方々の参加を頂き、6名分の奨学金になりました。「お手前を通じて、感謝する心、思いやりの心、尊敬する心を子どもたちに身につけて欲しい。大きくなつて世界と向き合つたとき、支援の経験が役に立つと信じております」と野木さん。茶道の精神と国際支援の気持ちが融合した素晴らしいイベントでした！

祖国の子どもたちが奨学金で将来に希望を

カンボジア留学生協会・関西は、母国の子どもの教育を支援するため、6月22日にチャリティイベントを神戸で開催しました。伝統的な美しい衣装をまとった留学生たちの踊り（写真下）が始まると、参加者たちは思わず見入ってしまいました。

次に、カンボジアについてのプレゼンテーションは同協会副代表のスン・ソカーさんが、奨学金については民際センターのスタッフがそれぞれ行いました。そして、ディナータイム！ 留学生たちが心を込めて作ったカンボジア料理に舌鼓を打つ参加者たち。料理を食べながら、新しい友達の輪が広がり、活気ある国際交流の場になりました。

イベントは弊センターのホームページやメールマガジンで紹介。神戸新聞や朝日新聞にも掲載して頂きました。結果は53名。カンボジア留学生や参加者からの追加寄付金で、5名のカンボジア児童が奨学金を受給できることに。同留学生協会の代表ポン・ソクパンヤさんは、次のように語ってくれました。「今回、初めて民際センターと協力してチャリティイベントを開催しました。祖国の子どもたちの教育を支援するというこのイベントは、私たちにとって意義深いものでした。奨学金受給で基礎教育を受けるカンボジア児童が、将来に希望を持ち、教育を継続しようとするきっかけになることを願っています」。



民際センターから年賀状を購入し、広報のお手伝いをして頂けませんか？

民際センターでは、全国から送っていただいた書き損じハガキを業者に換金してもらい、それを奨学金にしています。今回は換金方法を多様化し、かつ効率アップを図るため、書き損じハガキを年賀状に交換し、1枚50円で販売させて頂きます。

また、年賀状には民際センターのロゴやキャッチコピーなどが入っておりますので、年賀状を送るだけで民際センターの宣伝のお手伝いになります。

以下をご覧の上、10月末日までにお申込み下さい。

1セット： 100枚 価格： 5千円（送料無料）

締切： 10月末日 お届時期： 12月初旬

お申込み方法： 電話、Eメール お申込み先： 03-6457-5782

info@minsai.org (担当 関口まで)

*なお、在庫が無くなり次第、締め切らせていただきます。



事務局活用リスト

事務局ではさまざまな資料やサービスを用意して、ドナーの皆様のお問い合わせやご要望にお応えしています。

※ご利用につきましては、以下の要領でご連絡願います。

地域で奨学生や図書セットを広める活動をしたい

- ①書き損じハガキ・未使用テレカの収集
- ②使用済みインクカートリッジの収集
- ③パンフレットまたはリーフレットの設置
- ④不要な本を集めてブックオフに送る
- ⑤募金箱を設置したい

お気軽にお電話またはメールでお問い合わせください。折り返し資料などをお送りします。また、ホームページでも紹介しておりますので是非ご覧ください。

奨学生や現地のビデオを見たい

DVDは現地情報満載の広報ビデオ(13分)。パネルを貸し出すこともができます。送料は負担願います。

個人でタイを訪問し、奨学生に会いたい

80円切手を貼った返信用の封筒をお送りください(メール可)。折り返し、資料をお送りします(3~5月と10月、学校はお休みのため訪問できません)。

タイの奨学生と文通したい

- ①手紙の翻訳
- ②タイの切手購入

- ①:タイ語→日本語に翻訳します。手紙の原本と80円切手4枚を同封して送ってください。
- ②:タイ切手セット(12回分1000円)の代金は郵便定額小為替か現金でお願いします。
80円切手を貼った返信用の封筒も同封してください。

※奨学生の氏名をカタカナで読みたい方は、電話、メール、ファックスでお問い合わせ下さい。

民際事務局でボランティアをしたい

PC入力、DTP経験者、事務作業など。電話またはメールで担当、窓口までお問い合わせください。

奨学生の説明を聞きたい

事務局では随時無料説明会を行っています。参加希望の方は必ずご予約ください。

毎年忘れずに送金したい

お申し込みいただければ、銀行自動引落申込書をご送付いたします。

編集後記

前回に続き、イスラエル・パレスティナに派遣された際の思い出を1つ。かの地でお世話になった人々や友人の多くはイスラーム教徒で、彼らから時々「君の宗教は何か」と尋ねられました。いつも「形式的に仏教を信じている」と答えて逃げていましたが、仲の良かった友人について「実は何も信じていない」と答えたことがあります。すると、中学校の教師だった彼はこんな話をしました。「ここは紛争が多いところ。町に出かけて爆撃に遭って地下のシェルターに逃げ込んだとする。偶然、一緒になった他人としばらく時間を過ごさなければならない。その他の人の信じている宗教がわかれれば、その人の行動をある程度予測することができる。でも宗教を信じていない人は行動の原理原則がないので、ちょっとコワい」。ふ～ん、そんな風に考えるのですねえ。でも、日本には他者への愛情あふれる無宗教の人もたくさんいますよ！(富)



一般財団法人
民際センター

ダルニー通信 第71号 2013年9月1日発行 発行人：秋尾晃正
一般財団法人民際センター 〒162-0801 東京都新宿区山吹町337 江戸川橋東誠ビル5F
TEL : 03-6457-5782 FAX : 03-6457-5783
Eメール : info@minsai.org ホームページ : <http://www.minsai.org/>
振替口座 : 00150-0-57664 (奨学生専用口座)
表紙 : ラオス



SPOT LIGHT

.....

本のないラオスに図書館を寄贈しませんか？

昨年9月、新潟の大学生の国際協力団体「ラオスク」がラオスのサイヤペット小中学校に図書館を寄贈しました。それから1年。先生と生徒が図書館をどのように活用しているでしょうか？

ラオスクから寄贈された本が730冊。さらにユニセフとサワンナケート県からも寄贈を受けました。同校の小中学校の生徒数は各500名ですが、小学校では332名、中学校では399名が本を借りました。いずれも過半数を超えています。図書館の利用時間は月～金の朝9時～午後4時半で、4名の教師が2名ずつ交代で図書館を管理運営しています。同校のボンノン校長先生は「図書館ができる前、子どもたちは本を読む機会はほとんどありませんでしたが、図書館ができてからは、休み時間や放課後に子どもたちが本を読むようになりました」と満足顔で語ります。

図書館は閲覧室以外に生徒が集まって何かをするフリースペースがあり、そこで本を題材に芝居をしたり、読んだ内容について授業をしたりします。図書館が建つ前から同校はラオス農村部学校の読書推進活動のモデル校に指定されていましたが、図書館完成後、他の学校の教師が図書館を視察しに来るようになりました。今まで農村部に限られていた生徒の世界の境界線が、読書によって大きく大きく広がりました。



図書館のご寄付について

図書館のご寄付は以下の2種類があります。

- ①図書館のみ：約350万円
 - ②コンピュータと講師派遣によるコンピュータの授業も含む場合：約450万円
- ※為替レートおよびラオスの物価変動により金額が変わります。
お問い合わせや詳しい資料のご請求は担当：志賀まで。
TEL:03-6457-5782,FAX:03-6457-5783,
Email:shiga.daul@minsai.org